

[花き部門]

3. リンドウ短茎開花茎の発生を軽減する間引き法

[要約]

「おかやまオリジナルリンドウ」早生F₁系統の3年生株では、5月中旬頃までに、株の中心部のシュートを間引き、外側のシュートを残して、1株当たり8本とすると、短茎開花茎（極端に開花が早く、草丈が短い茎）の発生を抑制できる。

[担当] 高冷地研究室、野菜・花研究室

[連絡先] 電話 0867-66-2043（高冷地研究室）、086-955-0277（野菜・花研究室）

[分類] 情報

[背景・ねらい]

岡山県の低標高地域のリンドウ産地では、早生系統を中心に、極端に開花が早く、草丈が短い短茎開花茎が多発している。そこで、短茎開花茎となりやすいシュートの特徴を明らかにするとともに、対処方法を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. リンドウの株は、主塊茎部分と副塊茎部分から構成され、塊茎毎にシュートが群生している。各塊茎のシュートは中心から時計回りに1/4芽序を示し、内側の芽ほど新しい（図1）。
2. 「おかやまオリジナルリンドウ」早生F₁系統の3年生株では、主塊茎の中心部のシュート（Ⅰ～Ⅲ）では未発蕾茎、外側（Ⅵ以降）では正常茎、その中間部（Ⅳ～Ⅴ）では短茎開花茎、が多い（図1、図2）。
3. 副塊茎でも、中心（Ⅰ'～Ⅲ'）では未発蕾茎、外側（Ⅳ'～Ⅵ'）では正常茎が多い（図1、図3）。
4. 3月下旬に、地上部から見て、株ごとに群生しているシュートの外側を残し、1株当たり6～7本となるように中心部のシュートを間引くと、短茎開花茎の発生が減少する（図4）。

以上の結果から、リンドウの短茎開花茎は各塊茎の中心から数えて4～5本目より外側のシュートでは発生が少ない。間引きが必要な株では、間引き時に株毎に外側の茎を残すように間引きを行うと、正常茎となりやすいシュートが残るため、短茎開花茎の発生が減少する。

[成果の活用面・留意点]

1. 発生シュート数が9本以上の間引きが必要な定植3年目以降の株で適用する。
2. 短茎開花茎の発生は品種間差があり、発生の少ない品種では実施する必要はない。

[具体的データ]

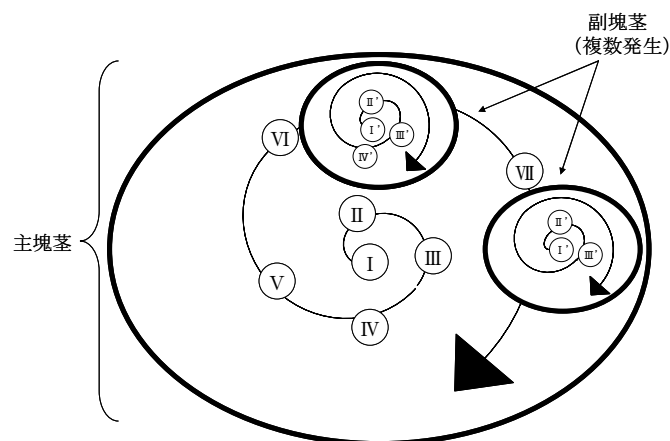


図1 リンドウ塊茎中のシュート発生部位決定方法
(頂点から見た場合)

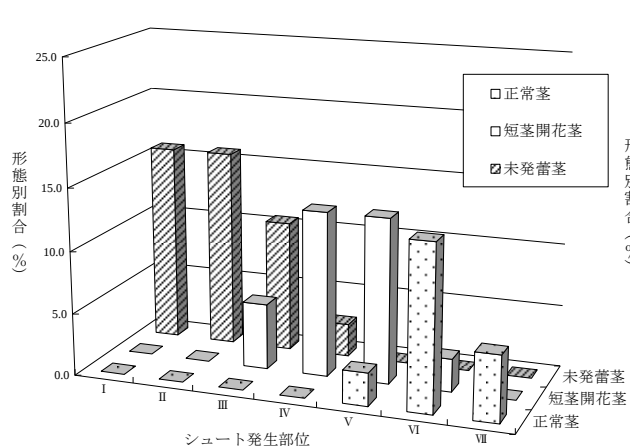


図2 発生部位別に見たシュートの形態別割合 (主塊茎)

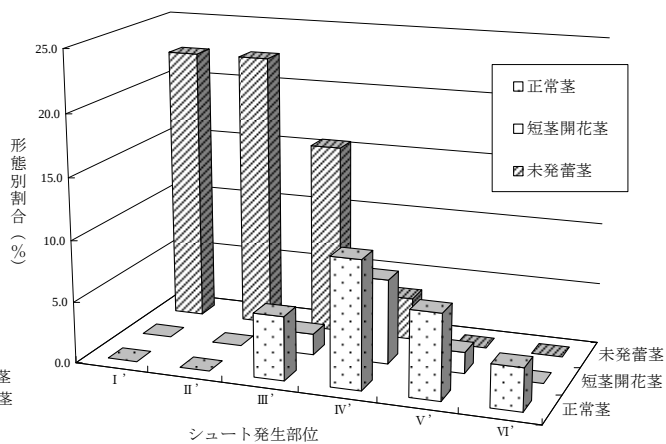


図3 発生部位別に見たシュートの形態別割合 (副塊茎)

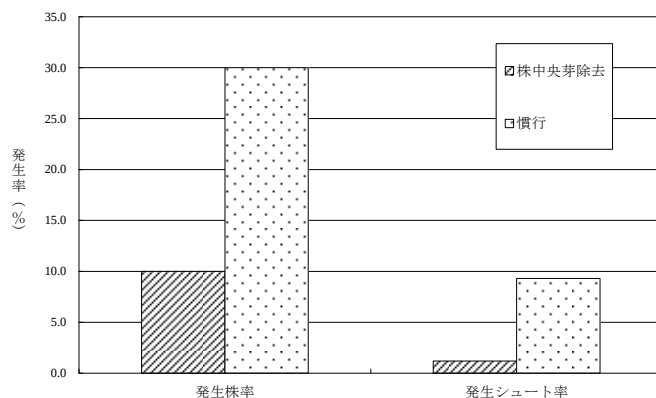


図4 間引き方法が短茎開花茎発生に及ぼす影響

[その他]

研究課題名：オリジナルリンドウの連続出荷と新作型の開発

予算区分：県単

研究期間：2007～2011 年度

研究担当者：中島拓、藤本拓郎